工場ルポ

旧関東コイルセンター

根津鋼材・青梅事業所

根津モデル応用 垂直立ち上げ実現

豊田通商グループの豊通鉄鋼販売から大手コイルセンターの根津鋼材（本社＝東京都荒川区、根津訓光社長）への事業譲受に伴い、旧関東コイルセンター（KCC）は4月から根津鋼材「青梅事業所」として新たなスタートを切った。過去にも村田鋼業（現浦安事業所）や東京スチールセンター相模原工場（現相模原事業所）をM&Aで取得し、より競争力の高い工場へとリニューアルしてきた実績のある同社の手によって、青梅事業所はどう生まれ変わったのか。立ち上げから半年を経た同事業所を取材した。

1月に事業譲受が決まると、4月からの垂直立ち上げを目標に掲げ、すぐさま根津鋼材が有する安全や品質管理、生産、システムなどのノウハウを水平展開。開設前から旧KCCと根津鋼材の双方の基幹システムを並走させ、4月の開設と同時に根津鋼材側のシステムへの完全切り替えを果たした。

三次元での番地管理を始めたコイルヤード

5月には早くもバックアップ用の旧システムを撤去。「スピード感を持って一日も早く根津鋼材の形にする」（根津社長）との意識は村田鋼業や東京スチールセンター相模原工場を引き継いだ際も徹底してきたことだ。

同事業所は石井俊二所長、山﨑隼副所長をはじめ、事務所6人、工場10人の計16人全員が旧KCC時代からの所属。事業譲受に際し、根津鋼材から青梅には一人も異動しておらず、青梅生え抜きの社員のみで新体制に順応できたことは特筆すべき点と言える。

新体制への移行後、最初に取り組んだのが職場の環境改善。「まず、社員たちに『変わった』と実感してもらう」（同）のが狙いで、より良く変えていく姿勢を示した。1990年の稼働開始から30年余りが経過し、近年は大雨時に現場を悩ませていた雨漏りの抜本的な対策として、屋根の修繕工事を実施。夏場の暑さを和らげる遮熱塗装も施した。

工場内には他の事業所で暑さ対策に大きな効果を上げている大型シーリングファン（西田技巧製）を8基設置。外壁の全面塗装や事務所内の什器の入れ換えも行った。

青梅が加わったことで、期待される役割の一つが母材コイル保管能力の拡大だ。同社は物流機能強化の一環として、関東地区の浦安、相模原、八潮、青梅の4事業所で保管能力を計340本分引き上げる計画を立てている。青梅のコイルヤードは2・5段積み換算で最大570本の母材コイルが保管可能。現在の保管量は350本前後で、200本以上の余力がある。

コイルの置き場管理には、同社が運用する三次元番地管理システムを導入。クレーンからコイルを降ろすと、自動的に位置情報がシステムに登録されるほか、次に加工ラインで使用するコイルを自動的にタブレット端末のマップに表示する「使用在庫の可視化」機能も併せ持つ。

入出庫口には開閉の速い高速シャッターを新設した。同事業所は天井が高く、シャッター開閉に時間がかかっていた。こまめな開閉が可能となり、雨風の影響を最小限に抑えるとともに、品質に支障をきたす原因となるちりやほこりの侵入を防いでいる。

同工場は製品の保管能力にも優れ、スリットコイルとシートの双方に対応する立体自動倉庫が稼働する。従来は独立したシステムとして運用していたが、これも根津鋼材の生産管理システムと連携させ、パレットの呼び出しに必要だった手入力を解消。タッチパネルで選択するだけに改良した。

根津鋼材仕様となったスリッターと立体自動倉庫（奥）

レベラーラインには、検査用の定盤を新設し、データ送信可能なデジタルノギスの使用を開始。寸法を測定すると、自動でシステムに登録された客先仕様情報と照合され、寸法が許容範囲かどうかの判定が出る。工場で使う軍手やウエスなどの備品もバーコード管理し、残り少なくなると、自動で発注がかかる。

事務所、工場ともに根津鋼材が全拠点で運用する自動化・省力化を図ったオペレーションへの移行によって、青梅の社員もメリットを実感。「作業者が使いやすいシステムとして練り上げられており、われわれがそうだったように初めて使う人や新入社員でも扱いやすい」（石井所長）。生産面でも「自動計測に変わり、人の目に頼らない形となったので、品質管理レベルがさらに高まった」（山﨑副所長）。

一般的には一日がかりとなる棚卸し業務も根津鋼材のシステムを活用すれば、1時間程度で終えられるようになり、以前の半年に一度から、現在は毎月の実施に改めている。

根津社長は「KCCが築いてきた人材や設備をベースに根津鋼材の仕組みを応用することで、短期間で変化を起こすことができた」と語る。浦安や相模原の立ち上げ時もそうだったように、すでに構築済みのシステムがあるため、新たなコストや労力をかけずにノウハウを水平展開できる点が大きい。今後も自動化や省力化、DX（デジタルトランスフォーメーション）への投資計画がめじろ押しとなっており、〝根津鋼材モデル〟の応用で大きく生まれ変わった青梅事業所はさらなる進化を見据える。

（音成 泰文）